

所属・資格 哲学科・教授

申請者氏名 永井 均

研究課題		「超越論的 - 経験的」二重体の一方向性
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p><私>は……世の中で永井均と呼ばれている人間である、と発見するルートは存在するが、その逆に、世の中で永井均と呼ばれている人間の心や体や自然的・社会的諸関係をどんなに細密に研究しても、永井均と呼ばれているその人間は……<私>であると発見できるルートは存在しない。これが「超越論的 - 経験的」二重体の一方向性である。この一方向性のゆえに、デカルトが最も確実に存在していると見なした「私」は、最も確実に存在しているのではあるが、存在を認定する権限を持った場所から見ると、実は存在していないことになる、という二重性格が生じる。この観点から、これまでの超越論哲学を検討しなおし、その本質を明らかにする。</p>
	研究の結果	<p>超越論哲学の代表者はもちろんイマヌエル・カントだが、彼はこの問題に気づいていた。だからこそ彼は、所与の〈私〉の意識から出発して、そこに与えられている素材だけから客観的世界を構成し、その客観的世界の内部に〈私〉を一人の人間として位置づけようとした。世界のあり方を十全に捉えるにはこれ以外の方向性がありえないことを知っていたからである。ところが、例えばカント研究書として最も影響力のあるものの一つである P.F. ストロウソンの『意味の限界』では、この方向性は事実上逆転されており、最初の〈私〉は「経験の自己帰属」が可能な直観可能な経験的主体、つまり一人の人間に同定されている。そこに辿り着く方向がこちらからの方向しかないという最重要の問題が無視されているのだ。この傾向は超越論的哲学に好意的な哲学者の間にもかなり行き渡っており、一方向性という問題がじつは理解されていないことを示している。</p>
	研究の考察・反省	<p>上でカント『純粹理性批判』を引き合いに出して例示した、〈私〉の側から出発せざるをえないという問題と並んで、マクタガートの『時間の非実在性』からは〈今〉の側から出発せざるをえないという問題があり、こちらについては下に提示したような二つの研究成果物がすでにあるが、この二つの関係については今のところまだあまり見通しが立っていない。そもそも〈私〉と〈今〉の共通性とは何かという問題を、従来のタテ問題に対してヨコ問題（たくさんの諸主体のうちのこの〈私〉、無数の可能な「今」のうちのこの現実の〈今〉の問題）を対置するという仕方でも考察していくことになる。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所		
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>大澤真幸・永井均（共著）『今という驚きを考えたことがありますか』左右社、2018年6月10日</p> <p>永井均『西田幾多郎--言語・貨幣・時計の成立の謎へ』角川ソフィア文庫、2018年11月25日</p>	